



校長 坂本 晋

みたけが原便り

第19回「虫の目と鳥の目と」

(1月始業式講話より)

皆さん明けましておめでとうございます。

新しい年令和3年が始まりました。去年令和2年は「コロナで始まりコロナで終わった年でした」、そう云えれば良かったのですが、コロナ禍は収束に兆しを見せていません。残念ながら7日には首都圏に緊急事態宣言も出され、いっそう厳しい新年となりそうです。

例えば三密はいけないというように、これまでの常識が通用しないということは、考えることは誰かに任せて大勢と一緒に歩いて行けば何とかなる、そういう時代が終わったということです。

当たり前と思われることにも、果たしてこれでよいのかと、想像力を働かせて自分で判断し確かめながら行動していく。それが新しい年のニューノーマルです。これまで以上に自分の生き方に責任を持つことが求められます。これは中学生といえど例外ではありません。

さて去年、2、3年生の皆さんは楽しみにしていた台湾、カナダへの海外研修旅行ができませんでした。本校の学びの大きな柱になっているだけに残念な気持ちもひとしおだったと思います。

もっとも、中学生の皆さんにとってはあらゆるものが学びです。実際、今回も楽しみにしていた異文化体験や英会話の学習機会こそ逃しましたが、「人生は思うようにはいかないのだ！」という貴重な教訓を学んでいます。ですよ。

コロナは予断を許しませんが、先生方は何とか中学校時代の楽しい思い出を作らせてあげたいと今一生懸命知恵を絞っています。海外が

難しい時には国内旅行も選択肢に入ってきます。

たとえば、県内の中高生は多くが修学旅行で、首都圏や京都・奈良といった関西方面に出かけますが、それも有りかなと考えていたら、去年の暮れ新聞の片隅に小さな記事を見つけました。

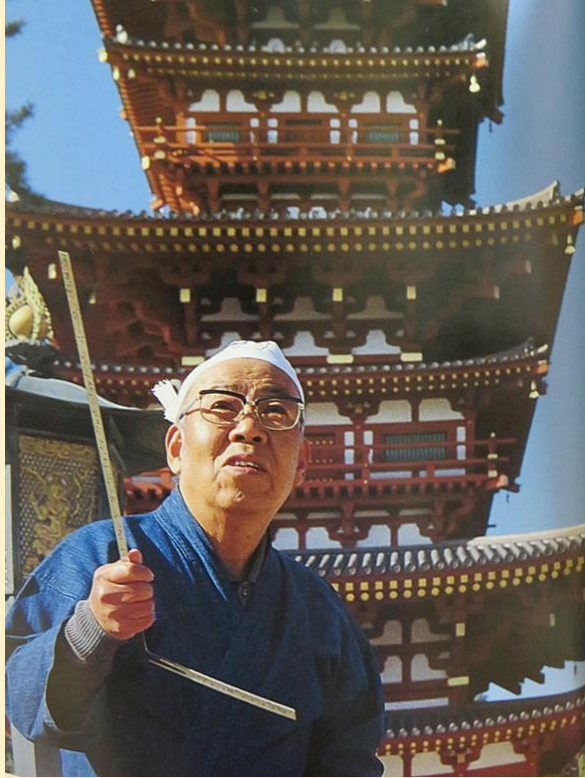
それは、奈良に修学旅行の立ち寄り先として定番の有名なお寺、薬師寺があるんですが、コロナのために延び延びになっていた薬師寺の解体修理がやっと終わったという報道でした。それを読んで思い出したことがあります。

現在の薬師寺には千二百年前に建てられた東塔と、三十数年前に新しく再建された西塔（西の塔）が向き合って建っています。いわば木造高層建築のツインタワーです。



この西塔を再建したのは西岡常一（つねかず）という伝説的な宮大工の棟梁です。世界最古の木造建築物といわれる法隆寺の解体修理を手がけたりして、一切の妥協を許さない厳しい仕事ぶりから鬼の名工と謳われた人なのですが、実は新しく建てられたこの西塔は、本来は左右同じ高さなはずなのに、東塔に比べて一尺（約30cm）ほど高く作られているんです。不思議ですよ。

ある時、西岡さんに新聞記者が「なぜ高さを揃えないんですか？」と尋ねました。するとその時、西岡さんはこともなげにこう答えたそうです。「千年後には縮んで同じ高さになるはずです。」



(西岡常一氏：出典 木に学べ)

さあ、皆さんはどう思いますか。

私たちは、毎日目の前の出来事に一喜一憂し、時にはああ苦しいなあと思う時もありますが、そんな時には、この話を思い出してみてください。

今自分の目の前にある仕事に全力を尽くし、細かい意匠を凝らして緻密に古代の建築物を再建するための目。これを「虫の目」とするならば、もうとっくに自分がいなくなった遙か千年先の時間まで見はるかす眼差し。これは高い空から俯瞰する「鳥の目」ですよね。

鬼と言われた西岡さんは二つながらの目を併せ持っているんですね。西岡さんが教えてくれるのは、いわば「虫の目」と「鳥の目」、両方の目で世界と人生を見つめなさいということなのだと思います。

今日はこれから試験がありますよね。それを念頭にベストを尽くして頑張るのは、「虫の目」で目の前の目標を見据えることです。そうして、その努力の積み重ねの先に「いつかはきっとこんな人間になるぞ！」と思い描くことは、「鳥の目」で人生を考えることです。コロナウィルスに負けられないためにも、このふたつの目を大切にしていきましょう。

最後にもうひとつ、西岡さんの言葉を紹介して今日の話締めくくります。

「だいたい木というものは、厳しい環境で育ったものほど強い。わたしは、山の高い所に生えていて、いつも強風がビュンビュン当たっていた木を、建物の中でも一番重要な所に使います。」

噛みしめたい言葉だなと思います。終わります。